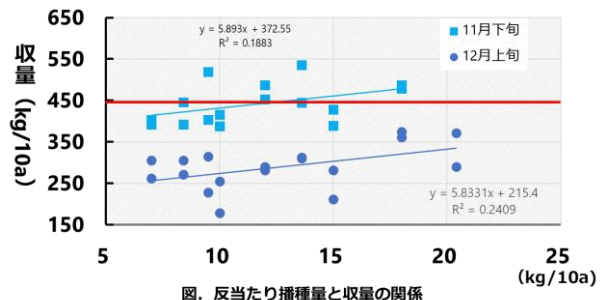
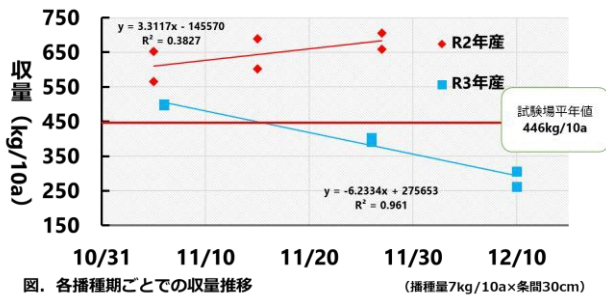


小麦「さとのそら」の収量低下改善に向けた栽培技術を検討しました

気候変動の影響は近年の麦作においても発生しており、特に、平成30年産の「さとのそら」では播種遅延から、年内の生育量不足から極めて少収となった。また、一部の現地では2～3月の穂肥施用時期が降雨で散布できないこと、水稻の春作業と競合することから省力的な一発肥料を使用しているものの、気象条件と肥効が適合せず少収が続いている。

そこで小麦の収量低下を改善すべく、1.播種遅延に対する技術、2.基肥一発肥料の構成を検討した。

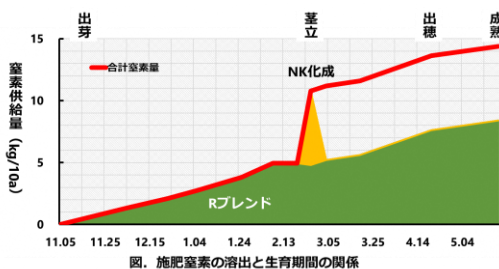
1.播種遅延に対する播種量の検証



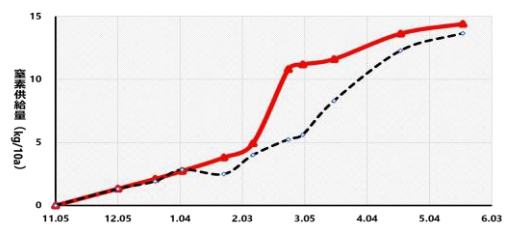
暖冬年では播種が遅れても収量が確保され、的確な検証ができなかった（R2年産）。通常の冬季条件となったR3年産では播種が遅れると低収となり、この気象条件下での播種量の増量効果を検証した。

12月下旬では播種量を5kg/10a程度増量することで平年収量までの回復が期待された。12月上旬では播種量増の収量回復傾向は見られたものの、効果は十分ではなかった。

2.基肥一発肥料の組成再構築に向けて



現状の追肥体系（赤実線）であると、収量とタンパク質含量が確保できる。



試験肥料（黒実線）は収量及び品質について有望で、R4年産以降も継続検証する。

(研究成果)

- 小麦奨励品種「さとのそら」の播種遅延に対し、播種量増が有効である。特に、11月下旬播種ならば平年並までの回復が見込まれる。しかし、12月播種では回復傾向にあるものの、十分な収量まで期待できず、極力11月以内で播種を完了させる努力が必要となる。
- 近年の気候に適合できず収量及び品質が安定しない基肥一発肥料は、改良型が有望であった。今後も継続的に検証していく。